

〈深い学び〉に向けた教材発掘（1）

—古典学習を中心に—

井上 泰

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」がねらいとされ、それに応じて授業改善が求められている。授業改善のポイントは、いくつかあろうが、本稿では、教材に重点を置き、〈深い学び〉に向けた教材化の提案を行う。

1. はじめに

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」がねらいとされ、国語科では、次のように目標が掲げられた。

▼新学習指導要領（第2章 各教科，第1節 国語）

第1 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(傍線は引用者)

傍線部にあるように、まずは「言葉による見方・考え方を働かせ」ることが目標の大前提となる。この「言葉による見方・考え方」は、次資料「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」の「各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ」をみれば分かるように、国語科特有のものとして考えられている。「言葉による見方・考え方」が、国語科特有のものか、また国語科で問題となる見方・考え方は、「言葉による」ものだけなのか、もう少し検討が必要だと考えるがここでは置いておく。

さて、「言葉による見方・考え方」だが、資料では次のようにまとめられている。

▼次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（別紙）

別紙1 各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ

言葉による見方・考え方

自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言

葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

(傍線は引用者)

二重傍線部「自分の思いや考えを深める」ことを目的として、傍線部「対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」が「言葉による見方・考え方」とされている。

では、こうした見方・考え方を働かせる学習は、どのようにして作られるのだろうか。学習形態等、さまざまに議論する点はあるだろうが、本稿では、教材発掘や教材化に重点を置き、どのような教材の、どのような言葉に着目することで、学習者のどのような「思いや考えを深める」ことができるのかについて考えていきたい。

学習指導要領の施行は、中学校が平成33年度から全面実施、高等学校は平成34年度から年次進んで実施となっている。移行期間は、中学校が平成30年度(2018)、高等学校は平成31年(2019)からである。新しい指導要領の実施に向けて、新たに教材も発掘され、提案されていくだろう。本稿もその一つとして位置づけられたい。

なお、本稿は、平成29年度・平成30年度広島大学学部・附属学校共同研究プロジェクト「深い〈学び〉を構築する国語科授業づくりに関する研究—古典学習を中心に」の研究成果の一つである。「共同研究紀要」には、『莊子』「渾沌」の教材化について、実践を踏まえて提案している。併せてご参照頂きたい。

2. 〈観念〉について考える

ここでは、漢文の教材化について述べる。テキストは、『笑林』。後漢の邯鄲淳(2世紀頃)の撰によるもので、笑話を集めたもの。その『笑林』には次のような話がある。楚人に山鳥(雉)を担ぐ者がいて、偶然出くわした男が何の鳥かと聞いた。楚人は、その男を騙して「鳳凰」と答えた。すると、その男は売ってくれと頼み、大金を払って買った。男は楚王に献上しようと考えていたが、一晚経つと鳳凰(雉)は死んでいた。しかし、その話は、

国中の人に伝わり、とうとう王にまで伝わった。すると、王はその男の思いに感動し、結局男が支払った金額の十倍以上の褒美を、その男に与えた。

■ 笑林
楚人有担山鷄者。路人問曰、何鳥也。担者欺之曰、鳳凰也。路人曰、我聞有鳳凰久矣、今真見之、汝売之乎。曰、然。乃酬千金、弗与、請加倍、乃与之。方將獻楚王、經宿而鳥死。路人不遑惜其金、惟恨不得以獻耳。国人伝之、咸以為真鳳而貴、宜欲獻之。遂聞於楚王。王感其欲獻己也、召而厚賜之、過買鳳之直十倍矣。

本話の笑いの対象は、まずは男が楚人に「欺」かれたところだろう。男は、鳳凰か確かめもせず、また疑いもせず、金額をつり上げられて大金を支払ってしまった。その男の無知や純朴さが笑いの対象となっているのだろう。しかし、話はそれで終わらず、男はその「実直さ」によって、最終的に大金を得る。男の無知や純朴さ、また「実直さ」が笑われる対象から報われる対象に変化していく。本話には、そのような面白さもあるだろう。

ところで、そうした展開が成り立つのは、「鳳凰」の存在があるからである。「鳳凰」は、聖天子が現れたことを示す瑞鳥で、実在の鳥ではなく観念上の鳥である。本文においても、男は、「鳳凰」の存在を前々から「聞」いてはいたが、「見」たことはなかった。しかし、実在する鳥として信じていた。そして、国民も確認もせず「真鳳而貴」と「鳳凰」の存在を疑うことなく、現れたことを貴いことと捉えている。王もまた見たことのない「鳳凰」を献上しようとした男の思いに感動した。つまり、本話は、楚国の中で、「鳳凰」が、見たことはないが実在し、貴いものであると、国中の人々に考えられていたからこそ展開していくのである。

本話を笑話としてだけ読むのではなく、上述のように「鳳凰」という言葉に注目し読んでいくことで、「鳳凰」という存在、つまり、〈観念〉について考えていくことができるのではないだろうか。「鳳凰」を実在の貴いものとして信じて疑わない人々の姿や次に示したように、「鳳凰」によって出来事が展開していく様、国中の人々が巻き込まれていく様を問題にすることによって、〈観念〉そのものの働きや社会における〈観念〉の影響などについて考えていくことができるだろう。

【出来事A】山鷄を担ふ者 之を欺きて曰はく、「鳳凰なり。」と。

【出来事B】路人 「我鳳凰有るを聞くこと久し、今真に之を見る、汝之を売るか。」と。

【出来事C】国人 以為へらく真鳳にして貴ければ、宜なり之を獻ぜんと欲するは、と。

【出来事D】王 其の己に獻ぜんと欲するに感じ、召して厚く之に賜ふ。

〈観念〉によって人々の認識や行動が規制されてしまうということは、本話に限ったことではなく、現代社会においてもよくあることであり、様々な問題の根源にあるものでもある。学習者にとっても社会を見つめる有効な視点（言葉）となるのではないだろうか。

最後に、本教材における「言葉による見方・考え方」をまとめると次のようになる。

○本教材における言葉による見方・考え方のまとめ

（〈観念〉についての）自分の思いや考えを深めるため、対象（鳳凰）と言葉（国人の様子）、言葉（出来事）と言葉（出来事）の関係を、言葉（国人の見たことはないのに信じ、貴いとしている様子や鳳凰というものの）の意味や働きに着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

3. 〈言葉の表現〉について考える 1

ここでは、漢詩、和歌、俳句を教材とし、それらの表現を読み解くことで、〈言葉の表現〉について考える学習について提案したい。

次の〈立秋〉を詠った劉禹錫「秋風引」は有名な漢詩である。

■ 秋風引 劉禹錫
何処秋風至
蕭蕭送雁群
朝來入庭樹
孤客最先聞
何処よりか秋風の至り
蕭蕭として雁の群れを送る
朝來庭樹に入り
孤客最も先に聞く

どこからともなく吹き始めた秋風。びゅうびゅう（蕭蕭）と吹き、雁の群れを南へと送っている。その秋風が朝の庭樹に吹き、孤独な旅人が誰よりも先にその音を聞く。秋風のもの寂しさと孤独な旅人のそれとが重なり合って、より一層もの寂しさやもの悲しさを感じさせる詩となっている。

本詩では、「秋風」が「蕭蕭」と吹き始め、それを孤客が「聞く」という“聴覚”が重要な役割を担っている。

ただし、詩全体では、「雁群」や「秋風」が「庭樹」に「入」る様子（揺れる木々）など、視覚的な要素も多い。本詩を読解するためには、聴覚による立秋への気づきといった点とともに、秋の情景を理解していくことが必要だろう。

さて、次に本詩と〈立秋〉の詠い方が近似しているものとして藤原敏行朝臣の次の和歌を取り上げたい。

「秋風引」と同じく、立秋を詠った詩であり、特に、秋風によって立秋に気づくという点は同じである。しかし、「目にはさやかに見えねども」という点が「秋風引」

とは異なっている。上述のように、「秋風引」の詩全体からは、立秋の情景が読み取れる。それを本歌では、「目にはさやかに見えぬ」と否定しているのである。それは、作り手に詠い手の“聴覚”の鋭敏さとそのようになってしまう孤独な詠い手の境遇とを強調するというねらいが

<p>■ 与謝蕪村 硝子の魚おどろきぬ今朝の秋</p>	<p>■ 『古今和歌集』 秋来ぬと目にはさやかに見えぬとも 風の音にぞおどろかれぬる</p>
---------------------------------	--------------------------------------------------------

あったからだろう。作り手である藤原敏行が「秋風引」を踏まえて作ったということは定かではないものの、本歌は、「秋風引」と比較すると、視覚（情景）を排して“聴覚”による立秋の気づきというのを特化し、詠い手の孤独や詠い手が感じているもの寂しさを詠っていることが分かる。

以上、「秋風引」と藤原敏行歌とをみてきた。次に、与謝蕪村の俳句を取り上げたい。

上に示したように、与謝蕪村には、藤原敏行歌を踏まえたと思われる俳句がある。「硝子の魚おどろきぬ今朝の秋」である。立秋をむかえ水温が低くなった金魚鉢の中で、金魚がびくっと動いた情景を捉えて詠まれたものである。「おどろきぬ」は、敏行歌「おどろかれぬる」を踏まえたものであろう。ただし、敏行歌では、詠い手が、「おどろかれぬる」と「れ」（自発「る」連用形）と自然と立秋に気づいたこと、つまり詠い手の感覚の鋭敏さが問題となっているが、本句では、金魚鉢の中の金魚がびくっと動いた（「おどろきぬ」）と金魚の動きが問題となっている。敏行歌が“聴覚的”であったのに対し、本句は“視覚的”であり、そこが大きな違いである。蕪村は、敏行歌のテーマと言葉を踏まえながらも、視覚的で、かつ金魚という生活の中にあるものをモチーフとして、句を作っている。

さて、以上の三つのテキストを比較すると次のようにまとめられる。

テキスト	聴覚	視覚	(立秋に)おどろく
秋風引	秋風の至り	雁の群れを送る	×
	蕭蕭 孤客 最も先に聞く	朝来 庭木に入り	×
敏行歌	○風の音	×目にはさやかに見えぬ	○風の音にぞおどろかれぬる
蕪村句	×	○硝子の魚おどろきぬ	○硝子の魚おどろきぬ

このように三者は、テーマを〈立秋〉としながらも、

それにいかに気づいたのかということをめぐることは、その詠い方（言葉）が異なっている。また、「秋風引」と敏行歌については、秋の寂しさやもの悲しさを読み手に感じさせるものになっているが、蕪村句については、水の冷たさやおかしみを感じさせるものになっている。このようなことを言葉に従って読んでいくことによって、同じ〈立秋〉というテーマでもその詠い方は様々にあることやその詠い方によって読み手に感じさせられることが違ってくことなど、〈言葉の表現〉について考えさせていくことができるだろう。

また、蕪村句は、敏行歌に対して〈翻訳〉の関係にある。「おどろく」という言葉をめぐって、敏行歌は、詠い手の感覚の鋭敏さに向けてその言葉を使い、蕪村はおそらくそれを理解しながらも、金魚という小動物の動きにそれを使い、それによって敏行歌では感じられなかったおかしみを感じさせようとしている。敏行歌で差し出された立秋の情感を、「おどろく」という言葉を軸に、あえておかしみに変換していく営み（＝翻訳＝創造）について考えていくこともできるだろう。

さて、本教材における「言葉による見方・考え方」をまとめると次のようになる。①は、全体におけるまとめで、②は、敏行歌と蕪村句のものについてまとめたものである。

- 本教材における言葉による見方・考え方のまとめ
- ①(〈言葉の表現〉についての)自分の思いや考えを深めるため、対象(立秋)と(各テキストの)言葉、言葉(漢詩)と言葉(和歌)と言葉(俳句)の関係を、(各テキストの)言葉の意味や使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。
- ②(〈翻訳〉についての)自分の思いや考えを深めるため、言葉(和歌)と言葉(俳句)の関係を、言葉(「おどろく」)の意味や使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

4. 〈言葉の表現〉について考える2

続けて、〈言葉の表現〉、特に〈説話〉の表現について考えることのできる教材を紹介したい。テキストは、『宇治拾遺物語』63段「後朱雀院、丈六仏奉作給事」巻4—11。本話は、後朱雀院が大病を患った時に、夢に外祖父である道長が現れたという話である。後朱雀院が大病を患い、死後の転生を恐れていた時に、夢に道長が現れ、自分は丈六の仏を多く作り、丈六の仏を作った人は子孫までも悪道に堕ちることはなく、後世善処は疑いのないものだと告げる。そして、それを聞いた後朱雀院は、明快座主に相談して丈六の仏を作った。

本話は、次に引用したように、後朱雀院の死後への不

安とそれに助言した祖父・道長の愛が描かれたものとして理解されている。

○新日本古典文学大系の脚注

後朱雀院の死の前は人々の印象に残りやすい何かがあったためか説話によく出る。この話も死後への院の不安、外祖父道長のあの世からの助言など、人情に訴えるものがある。

○新編日本古典文学全集の脚注

死後への不安を、十八歳まで最も頼もしい存在と見てきた祖父にすがって解消しようと願った孫の一念。造物供養の功德が後生善処の善根になるという信仰を、夢に現れて孫のために説く祖父の愛。

■『宇治拾遺物語』六三段
これも今は昔、後朱雀院、例ならぬ御事、大事におはしましける時、後生の事、恐れおぼしめしけり。それに、御夢に、御堂入道殿参りて申し給ひて曰く、
丈六の仏を作れる人、子孫において、さらに悪道へおちず。それがし多くの丈六を作りたてまつれり。御菩提において疑ひおぼしめすべからず。」
と。これによりて、明快座主に仰せ合はせられて、丈六の佛を造らる。件の佛、山の御仏院に安置したてまつらる。

しかし、本話は、そのように読むことができるものだろうか。本文には、道長の夢告があり、「これによりて」、後朱雀院は丈六仏を作ったとある。しかし、道長の伝えた内容通りであれば、後朱雀院は仏を作る必要はない。道長は、作れば子孫まで悪道に堕ちない丈六の仏を自分は多く作ったので、あなた(後朱雀院)は大丈夫だと言っているのである。しかし、後朱雀院は、丈六の仏を自分で作ったのである。道長の言葉を愛や助言として受けとったのであれば、「これによりて」安心した、というようなことになるだろう。しかし、本文は「これによりて」自分で作った、と違和感を持たせるように語られているのである。祖父の愛がテーマであれば、その愛情によって、後朱雀院は不安を解消し、道長の作った丈六仏に頼るだろう。しかし、その愛をあえて無視するかのようになり、後朱雀院は自分で丈六仏を作ったのである。

では、本話は何を伝えようとしているのだろうか。それは、道長と後朱雀院との祖父―孫の愛情関係ではなく、むしろ断絶を示唆しているのではないだろうか。天皇の系図を見ると、後朱雀院は道長の娘・嬉子と結婚し、後冷泉帝も生まれている。しかし、父の一条帝の家系である禎子内親王との間に男子(後の後三条帝)が生まれており、後冷泉帝に男子がいなかったために、その男子が後三条帝として即位する。藤原氏を外戚としない後三条

帝が即位することで、摂関家の権力が弱まったともいわれ⁴⁾、また、『古事談』巻1―62には、摂関家の頼通とは距離を置いた後三条帝の新政を「延久の善政」と称えている記事がある。さらには、後三条帝以後、その子孫(男子)が天皇に即位している。つまり、摂関政治の転換点が後朱雀院にあつて、本話はそれを隠喩しているのではないかということである。

本話は、道長の夢告(出来事)とそれとは反対の後朱雀院が丈六仏をつくったこと(出来事)とを、「これによりて」という言葉によってつなぎ、読み手に違和感を与えることで、摂関政治の転換点が後朱雀院にあつたことを、さらに誤解をおそれずにいえば、後朱雀院が意図的に後三条帝への流れを作ったことを隠喩として、語りだしているのではないだろうか。

こうしたことを、「これによりて」という言葉に注目し、さらに資料として天皇の系図や日本史の知識を活用しながら、読み解いていくことで、違和感を与える語りによって読み手に述べられていることとは違う文脈の物事を考えさせていくという、(説話)の表現について考え深めていくことができるのではないだろうか。

○本教材における言葉による見方・考え方のまとめ(説話表現への/言葉の表現への)自分の思いや考えを深めるため、言葉(出来事A道長の夢告)と言葉(出来事B後朱雀院の丈六仏造作)の関係を、「これによりて」という)言葉の使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

5. 人の〈心〉について考える

最後に、古文と現代小説を読み合わせながら、人の〈心〉について考える学習について考えてみたい。

まずは、古文。『源氏物語』幻巻である。幻巻には、紫の上を失った源氏の、紫の上を苦しめたことへの悔恨と人生への回顧が語られている。その源氏の心のうちを読み、人の〈心〉について考えることができないだろうか。次に、源氏の内心が語られている場面を引用する。

▼『源氏物語』幻巻 *紫の上の女房たちと

つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりをりもあり。なごりなき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしもありはつまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨めしう思したる気色の時々見えたまひしなどを思し出づるに、などて、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたまつりけん、何ごとにもらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知りたまひながら、怨じはてたまふことはなかりしかど、一わたりづつは、

いかならむとすらんと思したりしに、すこしにても心を乱りたまひけむことのいとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりもあまる心地したまふ。そのをりの事の心をも知り、今も近う仕うまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づるもあり。

入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、そのをりはしも、色にはさらに出だしたまはざりしかど、事にふれつ、あぢきなわぎやと思ひたまへりし気色のあはれなりし中にも、雪降りたりし暁に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしきはげしかりしに、いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、またはいかならむ世にかと思しつづけらる。曙にしも、曹司に下る女房なるべし、「いみじうも積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさびしきも、いふ方なく悲し。

二重傍線部にあるように、紫の上亡き後、源氏は出家を望むも、一方で傍線部にあるように、自分の浮気心によって紫の上を苦しめたことへの後悔や紫の上の思い出が様々に心に浮かんでいる。源氏の心の中には、出家という現在の意志や望みとともに過去への後悔や紫の上の様々な思い出など多くの思いや想念が混在している。

次の場面も同様に様々に悩み苦しむ源氏の姿が語られている。源氏は、これまでこの世における不満はなかったと思いながらも、不本意な宿世を生きてきたと自分の人生を振り返り（二重傍線部）、今はもうこの世に執着もなくなったと思う一方で（傍線部）、実際に目の前にいる人達と別れるとなると心乱れるだろうと思ひ、定まらない自身の心を嘆いている（点線部）。

▼『源氏物語』幻巻 ＊中將の君を相手に

「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず。世のはかなくうきを知らずべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふれば、かくいまはの夕近き末にいみじき事のとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、今なんつゆの絆なくなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れんほどこそ、いま一際心乱れぬべけれ。いとほかなしかし。わろかりける心のほどこかな」とて、御目おし拭ひ隠したまふに紛れずやがてこぼるる御涙を見たてまつる人々、ましてせきとめむ方なし。

このような源氏の心のうちは、源氏が出家するまで続けて語られているが、紙面の都合上、割愛する。

もちろん人間の心は一つの思いや考えに縛られてしまう時もあるが、一方で、源氏のように様々な思いや考え、感情によって、まとまりがなくなり、思案したり逡巡したりするものであろう。このような〈心〉のあり方について『源氏物語』を読み考えることができる。

さらに、こうした〈心〉について考える学習は、次に引用した小説を読むことによって、より考えやすくなるだろう。

若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』には、夫に先立たれた74歳の桃子さんの内心が語られている。

▼『おらおらでひとりいぐも』

ああ確かに。飛び飛びで細切れの逃げる思考を捕まえるのは容易ではないが、それでも年齢からすれば今がまとまってものを考える、絶好かつチャンスかもしれない。あと何年。とにかくこの状態を維持しながら、あと何年生きられるか。んだ。これからは常に逆算して、ものを考えなければならぬのであって。

んだんだ。それぞれ。いや違うでば。

様々の声が飛び交い、

おらが考えたいことはこの溢れる東北弁のことだ。

とひととき大きな声がする。

その声に深く肯んずるところもあり、あれやこれや話題が掠める中、この東北弁関連が喫緊の話題なのだ、と桃子さんはやっとなつて気付くのである。

改めて桃子さんは考える。今頃になっていったい何故東北弁なのだろう。満二十四のときに故郷を離れてかれこれ五十年、日常会話も内なる思考の言葉も標準語で通してきたつもりだ。なのに今、東北弁丸出しの言葉が心の中に氾濫している。というか、いつの間にか東北弁でものを考えている。晩げのおかずは何にすべから、おらどはといった何者だべ、まで卑近も抽象も、たまげだごとこの頃は全部東北弁でなのだ。というか、有り体にいえば、おらの心の内側で誰かがおらに話しかけてくる。東北弁で。それも一人や二人ではね、大勢の人がいる。おらの思考は、今やその大勢の人がたの会話で成り立っている。それをおらの考えど言っただけいいもんだがどうだが。たしかにおらの心の内側で起こっていることで、話し手もおらだし、聞き手もおらなんだが、なんだがおらは皮だ、皮にすぎねど思ってしまう。おらという皮で囲ったあの人たはといった誰なんだが。ついおめだば誰だ、と聞いてしまう。おらの心の内側にやどって住んだが。あ、そだ。小腸の柔毛突起のよでねべが。んだ、おらの心のうちは密生した無数の柔毛突起で覆われてんだ。ふだんはふわりふわりとあっちゃにこっちゃに揺ら

いでいて、おらに何か言うときだけそこだけ肥大しても
の言うイメージ。おらは困っているども、案外やんたぐ
ね。それでもいい、おらの心がおらに乗っ取られでも。

(中略)

すぐに話題は転じて、だどもなして今頃東北弁だべ。
そもそもおらにとって東北弁とは何なんだべ、と別の誰
かが問う。そこにしずじすと言ってみれば人品穏やかな
老婦人のごとき柔毛突起現れ、さも教え諭すという口ぶ
りで、東北弁とは、といったん口ごもりそれから案外す
らすらと、東北弁とは最古層のおらそのものである。も
しくは最古層のおらを汲み上げるストローのごときもの
である、と言う。

人の心は一筋縄ではいがねのす。人の心には何層にも
わたる層がある。生まれたでの赤ん坊の目で見えている
原基おらの層と、後から生きがために採用したあれこ
れのおらの層、教えてもらったどうか、教え込まされ
たかどうか、こうせねばなんね、ああでねばわがねとい
う常識だのなんだのかんだの、自分で選んだと見せかけ
て選ばされてしまった世知だのが付与堆積して、分厚く
重なった層があるわけで、つまりは地球にあるプレート
どいうものはおらの心にもあるのですがな。(12 ~ 17
頁。傍線は引用者)

夫と別れた桃子さんは、やっと自分で物事を考えてい
けるような状況になったのだが、その始まりは、傍線部
にあるように、心の中で「大勢の人」が会話しているよ
うな状態であり、桃子さんに「人の心は一筋縄ではいが
ねのす」という思いを抱かせ、そして「人の心には何層
にもわたる層がある」という発見を与えるものであった。

それ以降の桃子さんの思索は割愛するが、次に引用し
たように、様々な声が響き合う中、桃子さんはついに「自
分の底の心」を見つけ、夫の死の意味を見つけ出す。

▼若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』

愛だの恋だのおらには借り物の言葉だ。そんな言葉で
言いたくない。周造は惚れた男だった。惚れぬいだ男だ
った。それでも周造の死に一点の喜びがあった。おらは
独りで生きてみたがったのす。思い通りに我れ自力で生
きてみたがった。それがおらだ。おらどいう人間だった。
なんと業の深いおらだったか。それでもおらは自分を責
めね。責めではなんね。周造とおらは繋がっている。今
でも繋がっている。周造はおらを独り生がせるために死
んだ。はがらいなんだ。周造のはがらい、それがら、そ
の向ごうに透かして見える大っきなもののはがらい。そ
れが周造の死を受け入れるためにおらが見つけた、意味
だのす。(136 頁。傍線は引用者)

源氏と桃子さん、二人とも最愛の人を失い、そのこと
で否応なしに自分の心に向き合い、思い悩んでいく。そ
の結果、源氏は紫の上からの手紙を燃やして出家し、桃
子さんは、自分一人で生きてみたかったという自分の底
の心に気づいていく。それぞれ現実の中で出した答えは
一つかもしれないが、そこまでの過程は一筋縄ではない。
さまざまな思いや考え、声が、時には自分の意志とは無
関係に飛び交ったり、思い浮かんだりする。そうした中
で、思案し、悩み考えていくことで答えや答えらしきも
のが出てくるのだろう。このように二つのテキストを通
して、特に『おらおらでひとりいぐも』の桃子さんの言
葉(主に傍線部)を元にすることで、学習者には、「一筋
縄ではいかない、〈心〉について考えさせることができ
るだろう。

○本教材における言葉による見方・考え方のまとめ

(人の〈心〉についての)自分の思いや考えを深めるため、
対象(人の心)と言葉(一筋縄ではいがねのす／何層にも
わたる層がある)の関係を、(源氏の／小説の)言葉の意
味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い
直して意味付けること。

6. おわりに

本稿では、新学習指導要領でねらわれている、「主体的・対話的で深い学び」のうち、特に〈深い学び〉の構築に向けて、どのような教材の、どのような言葉に着目することで、学習者のどのような「思いや考えを深める」ことができるのかについて考えてきた。実際の授業においては、さまざまな展開や学習者の反応の中で、学びは構築されていくだろう。今後は、実践を通して、教材についても提案していきたい。

注

* 1 撰閣政治については、歴史学において様々な議論があるようで、本稿のような断言には懸念が残る。
なお、日本の歴史 6 巻『道長と宮廷社会』(講談社、2001)、全集日本の歴史第 4 巻『揺れ動く貴族社会』(小学館、2008)を参照した。

参考引用文献・本文テキスト

- 笑林…中国古典小説選 12『笑林・笑賛・笑府他〈歴代笑話〉』(2008, 明治書院)
- 秋風引…『中国文学歳時記』秋上(同朋舎出版, 1989)
- 敏行歌…新日本古典文学大系 5『古今和歌集』
- 蕪村句…『蕪村俳句集』(岩波文庫, 1989 年)
- 『源氏物語』…新日本古典文学大系『源氏物語』 4
- 若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』(河出書房新社, 2017)